

## 幼児教育のセンス・オブ・ワンダー

### うらわ美術館 図工・美術の展覧会「はみ出す力展」乳幼児部門ルポ

國學院大學栃木短期大学 人間教育学科 子ども教育フィールド  
准教授 名取 初穂

写真：國學院大學栃木短期大学 穴澤秀隆先生撮影（真岡鐵道にて）



## 1. カオスからはじまる「はみ出す力」

カオス（Chaos）—「混沌」、「無秩序」、予測不可能な変化を見せるもの

語源であるギリシア語では「宇宙が発生する以前」の状態をさし、古代中国神話においては「天地が分かれる前」の渾沌を言うのだとか。近年、図工や美術の「授業」を「展示」する、いわゆる『授業展』の情報を折に触れ耳にするようになったが、私にとって 2013 年にうらわ美術館で開催された「えっ？『授業』の展覧会 図工・美術をまなび直す」のファーストインパクトは今でも忘れ難い。うらわ美術館にて開催されたその展覧会は、会場に入ると真っ先に、故 中平千尋先生の“カオス ギャラリー”が強烈な輝きを放ちながら出迎えてくれる何とも魅惑的なしつらえだった。

その同じ場所で、三年前から『授業展』の幼児部門を新設するというので、さいたまの図工・美術教育部会を束ねていらした佐々木正裕先生からお声がけいただき、立ち上げに微力ながら関わらせてもらった。ここでは今回、そのなかで取り上げたひとつの幼稚園の展示内容を紹介したい。

「はみ出す力展」と銘々されリスタートしたこの『授業展』は、入り口を進むとまず幼児教育からはじまり、小学校、中学校、高等学校、そして特別支援教育や大学に至るまで、すべての授業実践を網羅した壮大なスケールで描かれていく。それぞれの先生方のまなざしに触れることのできる、熱量の高い展覧会なのである。「作品だけでなく、その横にパネルが展示されており、これによって造形表現・図工・美術で育まれるものが見えてくる」と山崎正明先生もご自身のブログで言及しているとおり、作品自体の出来映えの評価ではなく、その深淵にきらめくエネルギーに焦点を当てている。

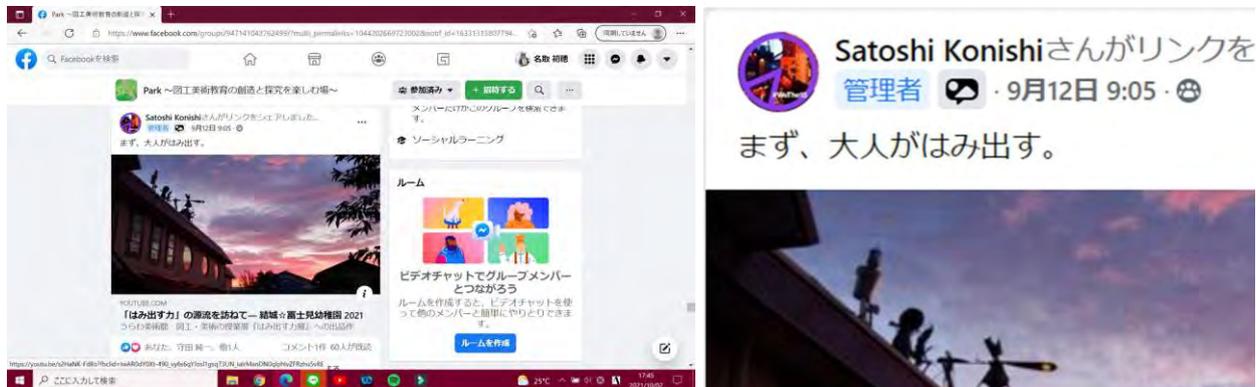
◆参照：山崎 正明先生のブログ <https://yumemasa.exblog.jp/30656985/>

「はみ出す力展」の前身 [https://artscape.jp/report/review/10093141\\_1735.html](https://artscape.jp/report/review/10093141_1735.html)



## 2. 「まず、大人がはみ出す！」

主催者でもある埼玉大学附属中学校教諭の小西悟士先生が、本展にて上映した幼稚園の映像作品について、共有のSNSで「まず、大人がはみ出す」と言葉を添えてくれた。この一言に、表したかったことがすべて集約されている気がして、私はとても嬉しかった。



以下に、「はみ出す力展」にて展示させていただいた2本の動画の情報を示したい。

◆富士見幼稚園・動画（約10分）  
2020年うらわ美術館 図工・美術の授業展「はみ出す力展」出品作  
タイトル：富士見幼稚園へようこそ ★ 2020 秋  
<https://youtu.be/IVfq8Hd3Zcl>  
製作：名取 初穂（國學院大學栃木短期大学 美術研究室）

◆富士見幼稚園・動画（約20分）  
2021年うらわ美術館 図工・美術の授業展「はみ出す力展」出品作  
タイトル：「はみ出す力」の源流を訪ねてー 結城 ☆ 富士見幼稚園  
<https://youtu.be/s2HaNK-Fd8o>  
製作：名取 初穂（國學院大學栃木短期大学 美術研究室）

次に、上記にて紹介させていただいた富士見幼稚園に関する2019年より3年分の展示パネルの内容を掲載する。継続して取材している園であり、特に注目している理由はこの幼稚園が日々子どもたちに自由な創造の場を豊かに保障しているという点である。まさに、園全体が“カオス”、はじめて出会ったときの感動は、その後いくたびと訪れても変わらない。



茨城県結城市 富士見幼稚園  
園長 鮎澤 伊江

## 今日は、これに描こうかな！

～園全体がキャンパス☆自分で選んで取り組む日々のアート～

- ・ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）より（10）豊かな感性と表現
- ・ 第2章 ねらい及び内容より 領域：表現 1ねらい（1）～（3）、2内容（5）・（7）

### 題材の魅力

大人とくらべてあらゆる感覚が渾然一体となっている幼児期の子どもたち。保育者側から無理にカテゴリ化・パッケージ化することをできるだけ避け、いつもそこにあるもの、自然の影響で変化するもの、一見ガラクタのようにみえるもの、畑で採れた収穫物など、日常の何気ないものを大切にしています。園内にとどまらず遠足で見たり感じたりしたことも含め、日々の幼稚園生活をとおして、すべてのものごとが見方・とらえ方・感じ方で変化するということ、宝物になることに気付いていきます。「表現したい！」と思ったその時に、好きなだけやればいい。それに応え得る環境がいつも園のあちこちにあることが魅力です。「今日は、どれに描こうかな？」

### 育てたい力

日々の自由な表現の時間を保障する中で、カタチのあるなしにかかわらず、自分も、自分の周りも、豊かに・楽しくするような、人間としての基盤を育てていきたい。（※「10の姿」参照）

強いられて表現するのではなく、「つくっても、つくらなくてもアート」一たとえ何もしていなくても「心の栄養」を貯えています。

※幼稚園教育要領 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿） 文部科学省



## 選挙板キャンパス



使用済みの選挙板は、定期的に園が市から譲り受けている素材のひとつ。30年以上前から実践している活動です。大きな白いキャンパスとして絵を描いたり、遊べる小屋を作ったり。ある時は、板の上に寝てクレヨンで等身大の友だちを描きました。どの子も寝転がって楽しそう！友だちにこんな服を着せたら似合うかな？とイメージも膨らみます。切り落としたかけらにも色を塗ったり模様を描いたりして「見立て」を楽しんでいました。

## 段ボールに楽（ラ・ク）ガ・キ



屋外遊びができない梅雨時期などには、宅急便の荷物やバナナの空き箱などを解体した段ボールに、クレヨンで思いっきり描きます。一人二人と参加者が増えていき、いろんな色が重なり合っ、空いているところに手を伸ばして、腕をのばして……。とにかくなんだか楽しそう。何かをやり遂げたような、そんな自信に満ちた表情でした。上手下手ではなく、カー一杯にやり遂げる爽快感は、子どもたちをいつの間にか笑顔にさせるのでしょう。

## 木の端材 ☆ アラカルト



地域の工場から頂いている大きささまざまな木の端材は、金鋸や釘を使った本格的な木工に使用することもあれば、描画のキャンパスとしても登場する素材のひとつ。好きな色や模様を描いたり、線路や電車にして遊びに使ったり。園庭の小屋の壁にも飾っています。ある時、木作業の際に出たカンナくずを見つけた子どもたちが、そこにもマーカーやクレヨンで描き始めました。子どもたちは、面白い！と思ったら、何でも試しています。

## ダチョウのタマゴ



園の獣医さんは、飼っているウサギの様子を見に来たときには必ず、ダチョウのタマゴを数個持ってきてくれます。そんな日の昼食では、タマゴに穴をあけて中身を取り出し、鶏のタマゴ25個分のタマゴ料理（卵焼きや炒り卵、もんじゃ焼きなど）を調理して舌鼓！残った厚い殻は壊れやすいため、大事に取り扱うことに留意しながら、絵を描いたり、人形の頭部にして遊んだり、飾り物として楽しんだり…。タマゴはみんなの人気者です。



## みんなで描くと 楽しいな☆

茨城県 結城市  
富士見幼稚園

園長 鮎澤 伊江

富士見幼稚園へ ようこそー

### 題材の魅力

「結城紬」で知られる街一茨城県は結城市にある富士見幼稚園は、今年で44歳。身体で学ぶことを基本とした自由な生活保育を実践している。シンボルツリーのエノキを中心に、約1400坪の自然豊かな環境のもと、日々、子どもたちは思い思いの遊びを展開している。

コロナ禍の今年はずっと通りの園生活とは違い、ダイナミックな共同制作や、密になってのエネルギーギッシュな活動展開は難しい状況があるものの、園児たちは、「日常」のおだやかなリズムの中で、描くこと・つくること・見ることを、淡々と紡いでいる。

今回展示する作品は、そんな状況下で生まれた、なにげない「お絵かき」の一枚一枚である。

幼児にとって、はじめから大きな白い画用紙を与えられて、決められたテーマの絵を描くというのは、いかに困難なものだろうか。そこには「失敗したらどうしよう」という緊張感がある。

富士見幼稚園では入園したばかりの頃は、とにかく自由に「ラ・ク・ガ・キ」を楽しめるように、長いロール紙やダンボール・そして使用済みの選挙版などの気楽な媒体に、「みんなで」描くということを日常的に行っている。そのような描画体験を積んだ子どもたちは、描くことに抵抗感がなくなり、いつしか一枚の紙にも堂々と描けるようになっていく。

### 育てたい力

「みんなで」描くことで、自然と学び合いが生まれ、また、廃材などの失敗が保障された描画媒体に好きな時に・好きなように描ける心地よい体験の積み重ねが、やがて一枚の画用紙にもものびのびと描ける力につながっている。



2021年7月 小編訪問が「初めてのスマホ」で撮影した幼稚園の夕暮れ

# 「はみ出す力」の源流を訪ねて—

## ようこそ☆結城のセンス・オブ・ワンダーへ

ナビゲーター: 名取 初穂 (國學院大學栃木短期大学 美術研究室)

茨城県 結城市

## 富士見幼稚園

園長 鮎澤 伊江

「子どもの声— こうしよう、ああしよう こうしたい、こうやってみよう 工夫が生まれる、次はこうしよう (鮎澤園長)」 コロナ禍の荒波に負けず、富士見幼稚園は今日もあふれんばかりの「センス・オブ・ワンダー」\*を湛え、呼吸する。\*センス・オブ・ワンダー: 神秘さ、不思議さに驚嘆する感性。レイチェル・カーソン / 『センス・オブ・ワンダー』 / 1966年 / 新潮社

一步踏み込めば、異次元旅行の始まり。ここは“不思議の国”— まるでおとぎ話の世界に吸い込まれてしまったかのような感覚にさせてくれる。さて、今日はこの秘密の花園を脈々と流れる川辺を旅してみよう。

## “ふじみっ子”の魅力

“ふじみっ子”の愛称で親しまれる富士見幼稚園の園児たち— その表現された痕跡や表現は、いきいきとして伸びやかだ。しかしながら、彼らにとって描くことやつくることは、何ら特別なことではなく、ごく普通の日常の一コマに過ぎず、強いられてするものでもない。例えば、入園してすぐに「この一枚の紙にチューリップを描いて」というようなアプローチではなく、まずは、「みんなで」、床に広げられた大きないらない紙などに思いっきり描きながら体験を十分に積んでいる。毎日がアート・園全体がキャンパス・ やっても、やらなくてもアート☆ うまい・へたがなくなると、表現することが楽しくなる！ 先生たちが、そういう考えだから、子どもたちが輝く。

## はみ出す力

「はみ出す力って、まず、先生たちがはみ出さなくっちゃ、子どもだってはみ出せない。だから、いつだって何か新しいことに挑戦したり、いろんなところにアンテナを張って、私自身が日々探求している(鮎澤園長)」

—「はみ出す力」は、ここから湧き出で、園全体を蕩々と流れゆく大河へとつながっていた。その水辺で気ままに遊ぶ楽しさを、子どもたちは日常的につかみ取り、さらに、自分色に着彩し、拡大させていくのだろう。まるで砂場遊びにペットボトルで水を流す瞬間のように、ワクワクした気持ちで—





園長 鮎澤 伊江



教頭 小貫 絹子



主幹教諭 鮎澤 未来

◆鮎澤園長インタビューより◆

「保育の中に“はみ出し”がなかったら、つまらないんじゃないかな。やっぱり、毎日、思いついたらまず、それを、“私”が実践して—それで、園の中にその空気を充満させるの。子どもは、やりたければそれをやればいいし、そういうキャッチボールを常に大事にしています。」

◆小貫教頭インタビューより◆

「園長が『全部が完璧じゃなくていい、自分の得意なところだけ出せばいい』という考えなので、先生たちはいつも自由にやれる。逆に、“自分”がないと、やりたいことがないと、ここでは生きていけない。子どもたちも『今日は何をしようかな!』って、考えてここに来ている。例えば 絵を描いていても、良いとか悪いとかは、絶対にない。子どもたちも、自由にやれる。だから、安心して表現できるんじゃないかな。」

◆ミキ先生インタビューより◆

「もともと、ものづくりは大好き。やっぱり、私自身が破天荒にやっているので、子どもたちには、『(身近にいる)この人(先生)が やれるんだったら、自分もやれるんじゃないか?』と思ってもらえたら—『やってみなくちゃ、わからないんじゃない?』と、子どもたちが 恐れることなくチャレンジできるように、背中を押している。ものづくりに“失敗”はないし、間違っ線も 色も、ない。自分を“さらけ出して”子どもと 対峙しています。だから、子どもたちも『いいんだ、これで!』という感覚は 掴んでいるように思う。」

# 幼稚園は人 保育者の人柄

幼稚園は人 保育者の人柄—  
子ども中心・自然の中で行う保育を提唱した倉橋惣三(Sozo Kurahashi,1882-1955)の教育理念より



富士見幼稚園のシンボル、栗の木の下の  
幼稚園はしめる時、園長がルーブルの庭で拾ってきたタネを植えた場所—





## 支える手 —富士見幼稚園の卒業式

### 「子どもが主役」を表現する、園長の背中



卒業式と言えば、校長先生が壇上から児童・生徒に卒業証書を渡すというのが通常である。ところが、富士見幼稚園の卒業式は、園長が保護者たちに背を向けたスタイルで行われるのである。

※富士見幼稚園では「卒園式」と呼ばず、子どもたちは在園中に十分に「業」を積んだとして「卒業式」と称している。

これは、文字通り、子どもを主役とする園長独自の具現化された表現であり、「保護者が最も見たいのは、自分の子どもが証書をもらう瞬間の晴れ姿(表情)なのだから—」そのために、富士見幼稚園では、子どもを壇上に上げて、会場の人たちと対面になるようにして授与式を行うのだという。

このような表現ひとつを以てしても、“ふじみっ子”たちのあふれ出すエネルギーの出どころ、源(みなもと)を、ここに見て取ることができる。

このスタイルで、卒業生を送り続けて44年—  
鮎澤園長の背中には、静かに、そして熱く、今日も園児に、保護者のみなさんに、そして園の先生たちに向けて、シンプルなメッセージを語っている。

ここが、子どもたちの「やってみたい！」を保证する要(かなめ)の場所。

富士見幼稚園の先生たちの人柄、生き様、存在そのものが、子どもたちの「はみ出す力」を引き出す、唯一無二の「環境」なのである。

“ふじみっ子根性”  
後輩たちにバトンタッチ！



卒業式を目前に「帽子交換」を行う園児たち。園生活のあらゆるシーンを通して、下級生たちは少なからず上級生たちの表現に憧れ、刺激を受け、その「心意気」を受け継いでいくのだろう。



### 3. カオスをただのカオスで終わらせずに、いかに視覚化できるか—

造形表現において、特に乳幼児のそれは画一化された作業を強いることや型にはめた指導はむしろ、無限に広がろうとしているせつかくの子ども「育ちの芽」を摘んでしまうようなものだろう。「はみ出す力展」のなかで小西悟士先生が“造形実験”の授業実践について発表しているが、幼児教育においてもまさに「子どもたちがいかに豊かに造形的な“実験”に打ち込めるか—」このあたりの環境設定が要になってくるのではないかと常々考えている。

このためには、子どもが自由に表現する場を日々保障していく大人の側が、保育の一日の流れのなかで「子どもが何もしていない（ように見える）」場面でも、大人の考える「何か」をさせようと焦るのではなく、無音の時間をも、意味あるものとしてゆったりと見守る審美眼があればどんなに良いだろうか。空白の時間・沈黙を、ただの無音と捉えず「意図しない音が起きている状態」とする考え方である。例えば、音楽家ジョン・ケージ（John Milton Cage Jr. 1912-1992）の『4分 33秒』（※演奏者たちが演奏をせずに聴衆と沈黙をともにする前衛的な楽曲）のように。

先生たちの“本気”が集結した「はみ出す力展」は、試行錯誤を重ねながら、今年でいよいよ4年目を迎えようとしている。小学校以上はエントリー後に審査が行われ、内容をより精査していくようだ。乳幼児部門（※昨年度より乳児の表現が加わり、全体としてより幅広い展示構成となった）について、現在浅羽聡美先生とともに「本来の乳幼児の“カオス”を、いかに視覚化していけるだろうか—」と思案している。

さて、どのような展示にもっていけるだろうか。微力ながら、挑戦的に模索していきたい。

#### 「はみ出す力展 vol. 4」～図工・美術の授業展 2022～

**会期**：9月11日（日）～9月18日（日）

10:00～17:00（入場は閉館の30分前まで）

※9月12日（月）休館日

※9月17日（土）14:00～16:00 オンライン鑑賞会

**場所**：うらわ美術館にて（観覧料無料）

〒330-0062

埼玉県さいたま市浦和区仲町2丁目5番1号浦和センチュリーシティ3F

Tel 048-827-3215

<https://www.city.saitama.jp/urawa-art-museum/>

**主催**：さいたま市教育研究会図工・美術専門部

**共催**：武蔵野線沿線美術教育実践学習会「び会」

**後援**：埼玉県教育委員会（申請中）、さいたま市教育委員会（申請中）

#### \*内容\*

乳幼児の造形表現・図画工作・美術の授業をパネルと成果物（作品など）を併せて展示することで授業の目的と課題を可視化し、これからの造形美術教育を共に考える展覧会